『歩けない』足病変のトラブルに

医療の進歩で新たな選択肢を提供

「歩き出すと足に痛みやしびれを生じ、少し休むとまた歩けるようになる」「最近、みんなと一緒に歩けなくなった」。足病変（足に傷や腫れなどの病的な変化が見られる状態）のトラブルは様々ですが、足の「血管」による病気がクローズアップされてきました。医療の進歩により、難治性の潰瘍や壊死の原因となる「閉塞性動脈硬化症」や「バージャー病」の患者様に、新しい治療の選択肢も増えました。当機構では日々予防医学的観点から啓発を深め、一人でも多くの患者様を血管起因の病気から守りたいと考えます。転換期を迎えた血管医学について、TVコメンテーターの南美希子氏が、機構理事の森下氏と佐田氏に話を聞きました。

徳島大学医学部 循環器内科 教授
血管医学研究推進機構 理事
佐田 政隆 氏

大阪大学医学部 臨床遺伝子治療学 教授
血管医学研究推進機構 理事
森下 竜一 氏

●司会●
TVコメンテーター/エッセイスト
南 美希子 氏

足の動脈硬化で歩行が困難に。全身血管の検査で早期治療を。

南氏　血管医学研究推進機構はどういった活動団体ですか。また「血管医学研究」とはどのようなものですか？

森下氏　当機構では「血管」が原因でおこる病気のメカニズムや再生治療（新しい治療）について講演会を開催したり、コールセンターを運営したりして、不特定多数の市民の方へ情報提供を行っています。近年では、閉塞性動脈硬化症やバージャー病に関する啓発キャンペーンを推進。予防医学的観点からオーダーメイドの情報提供を心がけ、患者さんが適切な治療を受けられるよう支援しています。

人は血管とともに老いる。血管を知るということが、人の寿命を知る。

森下氏　「人は血管とともに老いる」という有名な言葉があります。「血管医学研究」とは、血管から、老化具合を知るという医学研究を指します。血管の老化が人の病気を引き起こすため、「血管を知る」ということが人の寿命を知るということにもつながるからです。血管が硬くなる動脈硬化や、新しい血管を作りながら増殖する進行がんへの対応など、血管医学は非常に重要なものです。

南氏　動脈硬化が起こりやすい箇所はあるのでしょうか。血管医学領域から全身をめぐる血管をケアすることの大切さについて教えてください。

森下氏　動脈硬化が原因である脳梗塞や心筋梗塞は、日本人の死因の25％を占めます。心臓や脳の血管でおこる動脈硬化を予防することが重要で、生活習慣病といわれる高血圧、高脂血症、糖尿病の治療で可能です。あまり知られていませんが、足の血管でも動脈硬化が起こります。足の心筋梗塞のような状態で、２００メートル程度歩くと、痛くてそれ以上歩けなくなるといった症状が知られています。閉塞性動脈硬化症といいます。これらの症状が表れ始めたら、心臓や脳の血管でも動脈硬化が進んでいる可能性があります。

また、バージャー病は、全身の血管の炎症の病気で、通常は動脈硬化が起こりにくい手にも潰瘍のような治りにくい傷ができることがあり、ひどい場合には指先の切断にいたります。喫煙している若い男性はリスクが高く、指先の痺れや冷感がみられる場合は注意が必要です。

血管は全身を知る窓。

南氏　動脈硬化が原因の「足の血行障害」では、どのような事に留意し、治療を進めればよいのでしょうか。

佐田氏　動脈硬化は年配の方に多いのですが、ほとんどの方が足の不調がまさか血管の病気が原因だとは思いません。「足が冷たい」「だるくなった」といった整形外科的な主訴にて受診されるケースが多いですが、適切な検査を受けることで、動脈硬化による血行障害が原因といったことが判明すれば早期に治療ができるわけです。

森下氏　心臓で血行障害がおこると狭心症や心筋梗塞が起こります。足の場合にも徐々に症状が悪化してきます。最初はちょっとした痺れや痛みですが、少し進むと間欠性跛行（かんけつせいはこう）といって少し歩くと歩けなくなってきます。ひどくなると信号を渡りきれなくなるといったことが出てきます。そして、安静時疼痛といってじっとしていても痛いといった症状が出ます。切ってしまいたいくらい痛い症状で、最悪の場合は潰瘍（かいよう）、壊疽（えそ）にいたります。患者さんの日々の生活の質（ＱＯＬ）に影響する最悪な状況を回避するためにも早期治療が重要です。透析をしている方は、突然血栓ができるケースもあるので予防や早期の検査が大切です。

佐田氏　生活習慣病から複合的に罹患するケースは圧倒的に閉塞性動脈硬化症が多いです。ただし血管の炎症、全身の炎症が影響してくるバージャー病では、比較的若い男性で、喫煙している方が多いです。足の血管が痛んでいる場合、脳や心臓の血管も同時に悪くなっているケースが多いので全身を見ることが大切です。

南氏　閉塞性動脈硬化症になるとどんな体調の変化が起きるのでしょうか。また何か特徴的な自覚症状というものはありますか？

佐田氏　初期症状は、足が冷たくなったり、歩くと痺れたりといった症状が出ます。患者様の多くは、血管の病気と思わず、歳のせいにしたり、足腰が弱ったためだと考えたりする方が多いです。典型的な症状は、じっとしているとなんともないけれど歩き出すと足が痺れる、痛い、歩けないといったもので、片方の足から症状が出てくるケースが多いです。腰部脊柱管狭窄症と症状が似ているのですが、その場合には両足に出ることが多いです。

森下氏　動脈硬化の検査は「足だけ」「心臓や脳だけ」ではなく全身の検査も一緒に受けていただくことが予防につながります。血管は全身を見る窓です。しっかり調べてもらうことが大切です。

生活習慣病の継続治療と禁煙が基本。新たな治療法で選択肢が拡大。

南氏　足病変のトラブルは様々ですが、診察の受け方や診察を受けるまでの注意点について、アドバイスをお願いします。また患者さんに適切な医療を提供する上で連携医療の大切さについてもお話しください。

佐田氏　患者様の多くはまず足病変の症状から大病院ではなく、かかりつけ医を受診されます。しかし、必ずしも循環器内科の先生ではなかったりするわけです。当機構が行っている啓発活動を知っていただき、気になる場合はご自身で循環器内科を受診いただきたいと思います。足が痛い場合、患者様は整形外科へ行かれることが多いですが、血管の動脈硬化の可能性が疑われずに、治療が遅れるケースもあります。私たちは、病診連携の会（※）を実践したり、プライマリケアを実践しているクリニックへ向けて、新しい治療法の紹介をしたりするなど、様々な情報提供や意見交換を行い、連携を深めるよう努めています。

南氏　診断と検査の方法についてどのようなものがあるのでしょうか。また注意点はありますか。

森下氏　まずは足の痛み等から整形外科の先生に診てもらうことが多いと思いますが、病因が整形外科的要素ではない場合には、動脈硬化が原因である可能性が高いため循環器内科を紹介してもらうのが良いと思います。

佐田氏　循環器内科では、まず脈が触れるかどうかを確認します。ＡＢＩという足の血圧と手の血圧を計測して血管の広がり具合を見る検査や、血管エコーで狭窄の有無などを確認します。場合によって造影ＣＴ、ＭＲＩアンギオ、カテーテル、サーモグラフィなどで進行の度合いを確認します。

南氏　閉塞性動脈硬化症の治療はどのようなものがあるのですか？

森下氏　生活習慣病の治療を継続することが基本です。それでも痛みが軽減されない場合には、血管の造影を行い、狭窄している箇所を確認。血管を広げるバルーン療法、血管置換術、バイパス術などの外科治療を選択します。ただし、すでに心筋梗塞を発症した方や再発を繰り返している方は外科治療が困難なことが多く、足の切断に至ることも良くありました。しかし、２０１９年から血管を再生する遺伝子を利用した治療法が認められ、保険適用になりました。今まで思う様に治療が進まなかった患者さんにとっては新しい治療の選択肢ができました。

足の動脈硬化から起因するこの病気を、多くの方に知ってほしい。

南氏　足の血行障害を起こした患者さんが日常生活で気をつけなければならないことはありますか。「足の疲労」との違いはどのような点ですか。

佐田氏　やはり適切な治療です。検査を早い段階に受けていただくとともに、生活習慣病の治療、禁煙が大切です。症状が進んでくると治療の選択肢も減ってくるからです。

森下氏　足の動脈硬化から治らない潰瘍ができることで、場合によっては足を切断しなければならない病気になることを知っていただくことは、とても大切なことだと思います。特に生活習慣病がある方は、足の痛みの原因が疲労ではない場合があるわけです。血管の検査を受けていただきたいと思います。また心筋梗塞や脳梗塞をされた方も足の動脈硬化が進んでいる場合があるので、同時に検査をしてもらうことが大切です。

南氏　血管医学領域から機構理事である森下先生と佐田先生より貴重なお話を伺うことができました。「第２の心臓」ともいわれる、私たちのかけがえのない大切な足。人生１００年時代に備えて日頃から検診を受けて、健やか生活を心がけたいと思います。

※それぞれの医療機関の機能に応じて役割を分担し（機能分化）、患者さんの状態に応じて医療機関同士が協力（連携）することで効率の良い医療を目指すこと。

〈原稿制作編集〉
機構事務局長 太田祥江

特定非営利活動法人
血管医学研究推進機構
ANGIOGENESIS MEDICINE FORUM

tel.03-4570-2669
受付時間 9:00～18:00（※土・日・祝日を除く）

血管医学 検索
https://angio.jp

全世界で新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大が広がる中、日々医療の最前線で活躍される医療従事者の皆様に心から敬意を表するとともに、深く感謝を申し上げます。また感染により影響を受けられました皆様には、心よりお見舞いを申し上げます。